

龜山上皇にあらすして後宇多天皇なりとし、最後に時宗の信仲は禪より來るもの、外に其一族にして眞言宗たる賴助僧正より感得したる點も深かるべしと結べり。〔中村〕

●唐以前の福建及び臺灣に就いて 文學博士 市村瓚次郎

(東洋學報 第八年第一號所載)

唐以前の此の地方は福建臺灣の稱呼未だ存せず、今の福建省は秦の閩中郡、漢の閩越地方なりと謂はれ、古代より閩なる名稱を以て示されたる地方なるが、周禮曠方氏に八蠻七閩の語ありて此の地方の未開民族を總稱せり、蓋し閩は元來、種族名稱なるべく、閩と蠻とは語原の同一にして、等しく野蠻民族を意味すると思はるれば、閩とは此の種族の稱呼より施きて其の住せる地方をも指す語となりしなるべし、山海經にも閩は海中に在りて甌と隣界の地方なることを記せるが、續漢書郡國志、史記東越列傳、山海經郭璞注、史記索隱、元和郡縣志等に據りて東甌が今日の浙江省温州府なる永嘉江流域の地方なるを知り、此より推測して閩が今の閩江の流域即ち福州府より建甌府方面に亘る國なりしを知る、而も此の地方は久しく化外の地として知られざりしが、秦に閩中郡を置きて以來、漢の武帝此を經營する所ありしも、猶化外の觀ありき、三國に及び吳の孫策、此が經營をなし、數縣を置き、東、南、兩郡都尉を設けて此を統治せしめ、吳の永安三年(二〇〇年)

以後は後漢以來の諸縣の外に將樂以下の四縣を置き、此の方面は漸次開發の氣運に會し、晋の太康三年(二八二年)には東に縣を設く、唐代に入りて福州九縣建州五縣泉州四縣漳州三縣汀州三縣の五州二十四縣となり、時代を逐ひて開發せられしを知るに足る、廣東に比して開發の遅れたる福建の、其の對岸なる臺灣が、廣東の對岸なる瓊州島に比して開發の遅れたるは自然の結果にして、抱朴子金丹篇に見ゆる東翁洲、夏洲、夷洲の中、夏夷二洲は三國志吳志孫權傳にては徐福到達の地として記され、此が爲に古來此の二洲を以て日本に擬する説多きが、此は誤にして、夏洲は恐らくば今の瓊州島なるべければ、義楚六帖の如きは此の誤れる説をなせる甚しきものと云ふべし、而して夷洲の臺灣ならむとは太平御覽七八〇卷臨海水土志の記事により方角、距離、氣候、地形、地球、物産、風俗の如何にも臺灣生蠻人に合するに據りて推想し得、東晋、南北朝時代に化外の地となりしは政治的關係の生ぜざりし爲なるべし、隋に至りて復經營せられ、流求の名によりて知られ、後漢末より三國にかけて福建の開發せらるるに伴ひ漸く知らるゝに至りしならむ云云。〔那波〕

●今福發欄の剝舟調査報告

西村 眞次

(造船協會雜誌第十二號所載)

昨年六月大阪府東成郡鯉江町大字今福の鯉江川底より發見せる

刳舟に就て、著者の研究概報なり。緒言に於て先づ此の遺物の學術上に於ける價值の大なるを云ひ、調査の經過を説き、次に二個の部分より成る船體の構造、形状、大小を記載すると共に船材の樟なること、記組に依るに樟は古代にありては此の種の材料として用ゐたること多きが、そは木質が刳舟を作るに適せるにて、現今樟樹の大なる少なきも畿内にては古く此の樹の多かりしを地名より説明せんとし、舷側に現れたる色彩に就ては小川博士及び清水大阪高等工業學校教授の燐酸鐵の附着せるなりとの説に大體賛成せるも、色彩が特に中部にのみ明白なる點に就て多少の疑を存せり。第三章以下に於て著者は造船發達史上より刳舟の形式構造を區別して、單材刳舟、復材縫合刳舟、同釘着刳舟となし、今福の舟は第三者の内の植物を屬混用釘着の式なるを説き、舷部に板を置きて水の侵入を防ぎ、中部にて擴張力を作る爲にクロスス、ヒームを用ゐ、舷側に更に板を加へたること、後部には櫂又は打櫂をさし込みたる圓孔ある等を注意し、木刳舟の還元を試み亦釘着に使用したる釘類に木釘と鐵製の平釘、カスガヒ、縫釘、打釘の五種あるを述べたり。而して別に前後二大部の接合面の裝置より、此の舟が河川又は湖沼用なりとの藤倉高等工業教授を説き採り。地理的觀察の項にては埋没の状態と附近の土壤を驗して、發掘の際舟體の下方に存したる草木の葉にミツアフヒに近きもの

あることは地勢と併せ考へ埋没當時此の邊は淡水湖なりしかと記す。かくて是等の結果と、船體の下層より彌生土器の破片を出せる事等より綜合して、刳舟の製作年代を奈良朝前期、或は大和朝廷の末期なり、形状は南方系統のツヤマン型、直線型にして、日本造船史上より見れば倭人型に近く、傳説上の天石楢船を想像せしむるものなりと結論せり。此の刳舟に就いては先に考古學雜誌上(八ノ一、二)に大道弘雄氏の報告あり、發掘の顛末の如きは、れより精密なるも、刳舟其の物の構造の調査に至りては、此の報告を俟つて一層明にせられたる也。たゞ其の結論の項の如き、地理的觀察の項に於ける草木の葉の研究より淡水湖と斷ざる如きは未だ俄に定説と看做すべからざるに似たり。(梅原)

●東京灣の津浪に就きて

大森 房吉

(東京學藝雜誌所載)

津浪は、(一)暴風、(二)海底地震、(三)海中噴火、(四)噴火又は地震の際一時に多量の土石が海中に入る場合等に起る、中にも(一)(二)の原因による津浪は本邦に最多し。而して海中地震に因る津浪は、海水が其固有週期を以て振動し、數分乃至數十分毎に急激に漲落し、長時間を経て鎮靜す。暴風雨に基づくものは、氣壓減少の爲平均潮位面高まり、且強風の爲海水膨起し、又激浪により小波動多く、前者とは海水振動の形式著しく異なれり。